

ディスカッション

●発言者

杉浦 未樹(法政大学経済学部)／森 理恵(日本女子大学家政学部)／安城 寿子(阪南大学流通学部)／

平芳 裕子(神戸大学大学院人間発達環境学研究所)

●司会

帯谷 知可(京都大学東南アジア地域研究研究所)

帯谷知可(司会) 報告者の皆さんからコメントに回答
いただきたいと思います。

■日本のアフリカにおけるマーケティングの姿勢と ファッションをめぐる「規範」と「美意識」

杉浦未樹 後藤さんの質問は、アメリカニのもとの製法が、日本とは異なるのかということだ
と思います。後発者である日本はアメリカニを作
ろうというのははっきりしていたので、目指す
ところは同じだったのですが、アジアの綿が短
繊維であったので、日本は明治以来、細い綿
糸を作ることに苦勞していました。そのとき
に、全部を細い機械綿糸にしようというので
はなく、日本ならではの機械綿糸を作るガ
ラ紡などがありまして、厚手の生地を作る
技術も発達してきました。これが日本製の粗
布が厚かったことに活かされていたと考えら
れます。

マーケティングについて、「ジャパニ」という
言葉が出たことにもあるように差別化はした
はずですが、ここでも政治的な事情があっ
て、もともとアフリカ市場は日本人が最初
に開拓したというよりも、第一次世界大戦
中にインドを経由してたくさんの日本製品
が入っていった事情がありまして、初期に
は日本製品であると明示するマーケティングを
していないと思います。

次に、誰が価値を決めたのかについてです
が、これに対して私は、日本側がアフリカ
市場を相手にするときに、かなり現地の
ことだけを見て、その結果、アフリカ市
場に対して生産をするものを自分たちも
着ようという視点がむしろなくなってい
くと考えています。同時に日本が生産した
別の衣料品、たとえば麦わら帽子では、
自分たちの価値観が共有されるのだとい
う意識を持って東南アジアや中国に行っ
て失敗し

ています。同時代のそうした例に比べると、
アフリカについては先行製品を一所懸命に
研究したり、現地の市場動向を見たりす
る姿勢が強いように思います。

後藤さんのコメントの最初に美意識がキ
ーワードとして出てきて、規範と美意識
について考えるきっかけになりました。あ
らためて私の発表について考えますと、
この話の焦点は「シャツはどうあるべき
か」という単一の規範ではおそろくない
と思いました。むしろ美意識という多層
的な捉えかたを可能にするキーワードの
ほうが合致すると思います。裸に対する
規範というものがあって、それに対して
シャツができてくる。また「清潔である
べきだ」という規範が関わって、それ
に対してシャツができてくる。「裸を覆
うもの」と考えるか、「裸は美しいけど、
それを見せるもの」としてシャツを考
えて、シャツができてくる。もちろん「
シャツはどうあるべきか」なんですが、
一つのシャツというものに対して様々
なジャンルの規範が関わってくるとい
うことをむしろ言いたい。その意味で
は美意識に近いのかなと思いました。

■なぜメリヤスなのか

——急激な輸出の進展と、異なる位置づけられ方

杉浦 小形さんからの質問は、なぜメリ
ヤスを取り上げるのか、東アフリカでの
メリヤスと普通の綿のシャツとの違い
は何かという質問でした。なぜメリヤ
スを取り上げたのかというと、メリヤ
スが特に東アフリカでは、1926年～
1930年代初期の間に驚異的に輸出が
伸びたからです。「安価な新製品で、
便利な大量品で、ちょうど洋装が進ん
できたから下着も着るようになったか
ら着用し始めた」と、これを現地の規
範に関連づけずに捉えるべきではない
と思います。

通常の洋装のなかでは、メリヤスシャツは下着、綿布シャツはシャツとして区別されますが、この発表でとりあげたフル洋装でもスワヒリでもないという伸びてきたジャンルのなかでは両者に違いがなく、単品の上衣として同じように使えた。メリヤスシャツも一枚で着ていた。さらに、メリヤスシャツのほうが下をシューカにしたときに組み合わせやすいということがあったと思います。杉本先生が指摘して下さったように、サリーのように下に着るという発想が東アフリカは弱いということも強調しました。

もう一つ、なぜメリヤスなのかについて、報告で輸出製品段階説を出しましたが、そのなかでメリヤスというのが、杉本先生もおっしゃったように、雑貨で、メリヤスであると、まったく別なカテゴリーに置かれていて、研究史上位置付けられていないからという点もあります。メリヤスは、アフリカでも北アフリカと西アフリカと東アフリカではだいぶ位置付けられ方が違うこともわかってきたので、その点でも興味深いアイテムだと思います。

■ 近代的でもあり民族的でもある

第三のカテゴリーとしての白シャツの可能性

杉浦 杉本星子先生からのコメントへの応答を最後にしたのは、本質的な質問で、答えられるか自信がなかったからです。研究の意義を指摘して下さってありがとうございました。文明化の観点から見たときに、私が指摘したジャンルは、近代的でもあり民族的でもあり橋渡しのようなところであって、それを第三のカテゴリーと置く必要があるのかという点は、もっともだと思います。K. T. Hansenなどの香室結美さんが取り上げたアフリカの衣服を扱う研究者がアフリカの側から展開をみていくためにやはりこれを一つのジャンルとして捉えるべきではないかと言っていて、私はそれに賛同しています。しかし、これが近代的でもあり民族的でもあるカテゴリーの一つだと言われると、本当にそのとおりだと思います。

そして、ご指摘を受けて強調したいと思ったのは、東アフリカのイギリス人が「フル洋装はしてほしくない」と言うときに、そこにスワヒリが存在したという東アフリカの歴史的な事情です。インドでも、19世紀に現れたスタイルがあったと思いますが、二つのスタイルがあったところに、それらとは区別される三番目のカテゴリーが半ば偶発的にできた固有性を強調したく、近代的でもあり民族的でもあるジャ

ンルだとしても、これをもう一つ区別したほうがいいだろうと考えました。大きな枠組みで位置付けていくことも必要だと思いますが、個別の事情をもっと興味深く捉えられたらと思っています。

布か衣かのカテゴリーの違いで関税が異なったことに配慮することは本当に重要で、これからさらに調べたいと思います。西アフリカでは布と衣が区別されていて、その関係で布で出したという話を聞いたことがあります。衣類というカテゴリーにどこまでの製品が入るのかに今後注意して研究していきたいと思います。

杉本星子 第三のカテゴリーと言えるのかどうかとコメントしたのは、否定ではまったくなくて、こういう見方があるということがすごく興味深いと思いました。このようにカテゴリーとして置くとするならば、置くことで逆に何が見えてくるか、そこが大事だと思います。インドやアフリカを考えていくと、シャツの白さへのこだわりというのがヨーロッパの人以上にすごく強い。それと、特にワイシャツですが、ヨーロッパの場合はネクタイとワイシャツのセットが基本なので、ネクタイをしていなかったら正装には絶対なり得ませんが、アジアやアフリカではネクタイなしで正装になります。だからバリバリにアイロンをかけていないといけません。その意味で、ヨーロッパの被服カテゴリーとは違う形でシャツが受け入れられたと考えていくと、「第三のカテゴリー」という捉え方をするのも興味深いと思ったので、否定ではありません。ただ、それを考えていくと、1920~1930年代よりもっとあとの展開まで含めてみていく必要がある。そうすると、そういう議論ができるのかなと思いました。

■ 農作業着の近代化とモンペ流行の論理

—— 半官製に始まり美意識・価値観が後押し

森理恵 みなさま鋭いご指摘をありがとうございました。答えられないところもあるかと思いますが、チャレンジしてみたいと思います。

まず後藤さんからの質問についてです。日本の中だけではなく外地のほうにもという話がありましたが、前から日本の植民地や占領地の着物やモンペを調べていて、そちらのほうから思いついたようなところもあります。

農作業着の近代化の論理は誰の視点かについては、発表でもご紹介した尾崎智子さんの論文に詳し

く書かれています。半官製みたいな団体が『農村生活改善指針』(1931年)とか『生活改善の栞』(1928年)など、様々なキャンペーンを1920年ぐらいから何度も打っていきます。そういうなかで農村生活を改善してもっと能率を上げようということなので、誰の視点かという、当時の家政学者や民俗学の人などの視点で普及させていこうということで、まずはその段階です。その後広まっていくなかで、足が分かれたものを穿くことにはすごく抵抗があって、広まった地域、広まらなかった地域、いろいろな例があったことが指摘されています。まずは半官製みたいなものとして広まりつつ、身体性なども関わって次第に広まっていったのかなと思います。

それと並んでモンペの流行の論理についてですが、井上雅人さんなど様々な人が指摘しているように、女性が足が分かれたものを穿いてすごく動きやすいので広まったということはもちろん正しいと思いますが、私としてはそれもあるだろうけれど、そうではないところを言いたいと思っています。ご指摘されたような民芸運動や、それこそファシズム期の生活文化運動など、「農村にこそ本当の日本民族の魂があるのです」みたいな美意識というか価値観というのがモンペの流行の論理ではないか。本当にそうかどうかを証明するのは難しいですが、1930年代に華やかな洋服や派手な着物が流行っていましたが、そういうものへの反発——身体性とかそういうことではなく、美意識の意味での反発があったのではないかと思います。

アッパッパはモンペより少し前、1920年代かと思いますが、すみません、アッパッパについては答えられません。

■「ファッションablではない」ことこそが モンペの普及に貢献した可能性

森 杉本先生のコメントであったように、ファシズムというプロパガンダということがすごく言われて、例のワークショップでもプロパガンダに関する発表が多かったと思いますし、私が写真として例に出したのも全部プロパガンダです。植民地朝鮮の女学生がモンペを穿いている姿の挿絵や、台湾の女学生がモンペを穿いて勤労奉仕をしているとか、インドネシアのものもプロパガンダ誌です。現在画像として使用できるものの多くがプロパガンダなので、もちろんプロパガンダと切っても切れないのは当然です。

ただし、女学校の制服の場合は、1943年に「へちま襟」と呼ばれる統一の女学校の制服が作られて、その下がモンペです。ですから、モンペは都会から地方に広まったということではなく、全国一斉にモンペの制服が1943年に発表されました。ただし、それはさほど普及しなかった。新調するのは資源の無駄遣いなので、新調せずにあるものを着るということでも良かったので、それほど普及しなかったと言われてます。そのへちま襟の制服に対してはものすごい抵抗があって、嫌だからお姉さんのセーラー服を着るなどといった様々な逸話が伝えられています。

ですから、モンペが都会的なファッションablなものとして広まったということはないと思います。むしろファッションablではないところが良かったということだと思います。モンペはかっこ悪いとか、田舎臭くて嫌だったという言説はあふれていて、井上さんの本でもどこでも書かれています。にもかかわらずなぜ普及したかというのは、もちろん穿いてみたら動きやすく便利だったというのは一番にあると思いますが、私はそこに付け加えて、先ほども言いましたがファッションablではないことが逆に良かったのだと考えています。もうファッションablを追いかけてもすんで、みんな同じという点良かったのではないかという趣旨です。それが間違いだと言われると、まだ証明はうまくできません。

杉本 私がコメントしたのは、女学生がファッションとして着たということではなくて、女学生のモンペ姿がプロパガンダに使われたのではないか、ということの問題視したかったからです。

森 もう一つ杉本先生が指摘された緋と縞の流行については、なるほどと思いました。緋や縞が流行していて、それがたくさんタンスにあったからモンペに仕立てたとか、民芸運動で緋と縞がもてはやされてという鋭いご指摘をいただきました。緋や縞にもいろいろありまして、銘仙のような緋ですとまた少し違ってきますし、それこそ本当に流行していたような派手な緋を仕立て直したモンペも残っていて、そういうものを見ると私たちがいま思うモンペのイメージとはまったく違います。朝ドラでよく出てくるモンペは、藍染めで細かい模様の緋だったり縞だったりという固定されたイメージがありますが、現在世の中に残っているモンペを見ると、ど派手な銘仙で作られたモンペもあるので、民芸のなかでもてはやされたようなあるべきモンペのイメージと、

実際にタンスの中にあったもので作ったモンペというのは少し違うかもしれませんが、たしかに緋や縞の隆盛と結びついていると思いますが、緋や縞と一言で言っても民芸運動家が喜ぶような緋から眉をひそめるような緋まであるので、そのあたりを細かく見ていく必要があるかと思いました。

■「誰でも着られてどこにでも行ける」ことで 建前としての階級差をなくしたモンペ

森 最後に小形さんのコメントについてです。モンペが良いとなった理由が、上からなのか下からなのか。もちろん最初は上からで、軍人が防空演習で着るようにと国民に言ったわけですが、にもかかわらず太平洋戦争後半まで実際には普及せず、ファシズム化でバツと広まったのは先ほどから述べている理由かと思います。ですから、下からということになると思います。

井上雅人さんの本も大いに参考にしていますが、井上さんが強調されている自家裁縫については、私はあまりわかりません。この時期はほとんど何でも自家裁縫です。

身体については、先ほどから繰り返し述べたとおりです。モンペがどうやって階級をなくせたのかについては、本当になくせたのかどうかは難しいですが、当時の言説を見ていると、上流のお嬢さんであってもモンペを穿いて防空演習に出てきたとか、それを見てすっとしたという言説もあったり、建前としては階級の上下に関係なくモンペを穿くことになっており、セレモニーにもモンペで出て良いとなりましたので、実際になくせたかどうかはわかりませんが、建前としての、誰でも着られてどこにでも行けるモンペという服装の魅力はあったと思います。

■雑誌における服飾デザイナーの意向の扱いと 異国趣味化の言説が再生産される仕組み

安城寿子 後藤さんから、雑誌にファッションデザイナーやブランドのものが掲載される時に、どれくらいデザイナーの意向が反映されるのかという質問がありました。あくまでも一般論としてのお答えになりますが、当然ファッション雑誌の掲載の仕方によっては、ブランド側が拒否して、服を貸さないと、「今後おたくの雑誌のインタビューにはいっさい協力しない」ということは十分あり得ます。一方で、無名なブランドやデザイナーが、不本意な形であっ

ても掲載してもらえれば名前が売れるからいいということ、甘んじて受けることもあると思います。川久保の場合、あのような形で掲載されることを仕方がないと思っていたかどうかという本人の意向はわかりませんが、一般論としてはそんなところです。

スライドの中でも明示していたかと思いますが、本日の報告では、最後の歴史言説のところ以外は、欧米のファッションメディア、特にフランスのファッション雑誌においてどのように語られてきたか、どのように自己表象を行ってきたかについてお話ししました。例外として、パリ進出前後の日本国内ではどうだったのかという比較をしましたが、そこで出てきた毎日新聞や朝日新聞以外は、すべてフランスのファッション雑誌を中心とする欧米メディアです。*Marie claire*などの雑誌の名前が出てきて、それらには日本版もありますが、フランス系の日本雑誌ではなく、すべて日本版のものではなくてフランス版です。*Vogue*もアメリカ版、フランス版といろいろありますがフランス版で、すべて日本のものではありません。

ただし、CASE 4 について、今日はたまたまKCIのFuture Beauty展を取り上げましたが、特に日本から世界に向けて後年の歴史言説のなかで異国趣味化する言説が発信されているというわけではなく、欧米のキュレーターや研究者がそのように語ったものもあります。ですからCASE 4 のような語られ方については、特に日本から発信されているとか、欧米において言われているということはありません。しかし、欧米のキュレーターや研究者が日本人が書いた本を根拠として引用して、日本のファッションデザイナーの仕事を異国趣味化する言説が再生産されるということは、一つ言えるかと思います。

■川久保玲が注目された背景と文脈

——「日本」への注目の高まりと全体のトレンド

安城 杉本先生からのご質問で、フランス人が川久保玲と同じようなことをしたら拒絶されたかどうかという仮定は、お答えするのが難しい質問だと思いますが、いくつか言えることはあります。川久保玲は1980年代初めに、70人中10人を占める一大勢力として日本のファッションデザイナーが注目される中の1人として出ていて、なおかつそれ以前、1970年代にパリに進出していたデザイナーとの差異が明確だったからより注目されやすかったわけです。同時

代のそうした背景と前からの文脈とがあったからこそ注目されやすかった。川久保玲がただ1人でパリに出ていくよりも注目されやすかったということは確実にあると思います。

それからファッションに限ったことではなく、1980年代前半は貿易摩擦で日本に対するバッシングも高まっていたが、一方でバッシングの対象である日本の文化やファッションがどのようなものなのかがとても注目されて、頻繁にそういったことを語る記事が欧米のメディアで掲載されていた時期でもあります。ですから、二重に日本のファッションデザイナーが注目されやすくなか出ていったからこそ、頻繁に取り上げられたということはあると思います。

その一方で、もう一つお答えできることとしては、同時代のフランス版の*Marie claire*や*ELLE*といった若者向けのファッション雑誌を見ていくと、日本人のファッションデザイナーに限らず、少し着崩したり、あえてくつろいだ感じの服、要するにかっちりとしたフォーマルな服ではないものが頻繁に取り上げられるようになっていました。報告の最初にお見せした服などを見ると、破壊的な意匠が見られることとは別に、洗いがかけられてクシャクシャになっていたり、ゆったりして体を締め付けない形であったり、かっちりしたフォーマルな服とはまったく違う方向性のゆとりのあるゆったりした服であることがおわかりいただけると思います。着やすく、普段簡単に着られて、なおかつどこかに個性があるような服は、日本のファッションデザイナーに限らず、当時のパリコレで活躍していた他の若手のデザイナーによっても作られていたし、そういうのが良いものとして、ファッション雑誌で新しいファッションとして取り上げられる機会が増えていました。日本のファッションデザイナーにとどまらない同時代のそういった状況もあったことを一つ付け加えておきたいと思います。

■ ファッションの歴史研究に欠けている 正確な史料検証の積み重ねと議論

安城 小形さんの一つ目のご質問で、異国趣味化する神話の一方で、特にコムデギャルソンの場合はアヴァンギャルド神話があるというのは、おっしゃるとおりだと思います。それがいつぐらいから出てきたのか、揺り戻しなののかについては、1990年代後半

からアートとの関連のもとにコムデギャルソンを含む何人かのデザイナーが語られる機会は増えていて、美術館でも盛んにファッション展が行われるようになっていったわけですが、その過程でアヴァンギャルド神話の勢いがより強くなって現在に至っているということはあると思います。

その一方で、異国趣味化する言説を見ていくと、しばらく出てこないなと思うと、ふっと思い出したように出てきて、底流としてずっと続いているものです。それがまたポツと出てくるのに何かきっかけがあるのかどうかというのは、いまはつきりお答えできませんが、底流としてそれはずっと続いています。一方でアヴァンギャルド神話については、いま申し上げたような1990年代後半以降の動向が関係していると思います。

二つ目のご質問ですが、脱神話化というよりは、もっと基本的な、極めてシンプルな、ファッションの歴史が語られる際に、一次史料に即して当時の状況を正確に明らかにしていくことを心がけるという歴史研究の基本中の基本が徹底されないのは何故なのかということに尽きると思います。例えば展覧会のカタログの解説で、どこかの概説本に書いてあるような眉唾の俗説をそのまま書いてしまうことそれ自体が問題だということ、ファッションの歴史を記述する人々の間でそのような問題が問題として認識されないならば、ファッション研究そのものの価値や信頼度を貶める結果にしかならないのではないのでしょうか。コムデギャルソンの場合、80年代当時のパリで黒がタブーどころかむしろ流行色だったということが明らかになれば、「黒のタブーを打ち破ってすごい」という俗説は否定されるわけで、それでは何がどのように評価されたのかという議論になっていく。そういう正確な史料検証の積み重ねと議論をちゃんとやっていかないとアカデミックな研究のレベルには到底到達できませんよねという話です。

コムデギャルソンに限らず、特定のファッションデザイナーやブランドの歴史が語られるときに、何が誰によってどうして注目されて、どのように同時代に語られ、当時の背景としてどのような状況があったのかということ、を、ていねいに検証していく作業は現在でもおろそかにされ続けているように思います。神話化したい、何か大きなことを言いたいという欲望が先に立っているからそうってしまったのか、それとも一次史料を詳しく見ていかない

この結果として神話化が起こるのか、あるいはその両方なのかわかりませんが、それをよしとしてしまうなら、ファッションの歴史記述はすなわち歴史学の方法論の基本中の基本を踏み外しているということになります。コムデギャルソンがどうしてここまで有名になったのかとか、当時どうだったのかに対する疑問を持つ人はたくさんいるのに、それに対する答えとしてコムデギャルソンの歴史を語ったものを見ると、いつも同じような俗説の焼き直しが繰り返されています。当時の複雑な対立や文脈の考察を一次史料から明らかにしていくという当たり前の作業が徹底されず、常に俗説をなぞるような単純化された言説に落とし込まれていくという問題があり、それがファッションブランドやデザイナーの歴史を語るうえでの大きな問題として、ずっと横たわっているように思います。

ご質問の答えになっているか不安ですが、歴史的に明らかにしていくことをきちんとやったその先の歴史記述に何があるのかと言ったら、歴史記述として当然に求められるレベルによく到達することができるということではないでしょうか。

■男女ともに着ていたモンペが

女性だけのとなるプロセスと「農村の美」

帯谷 ここからはディスカッションをフロアに開いて、報告者のレスポンスに対してコメンテーターの方から応答していただくことも含めて、自由にご発言いただきたいと思います。

平芳裕子 興味深いご発表で、たくさんの知見をいただきありがとうございます。森先生にうかがいたいことがあります。日本の服飾史を考えるうえでモンペの位置付けは興味深くまた難しい対象だと思いますが、服飾史だけではなく、民俗学の研究を見ると、モンペに関する論考はそれなりにある気はしています。私も戦中のことに興味を持ってモンペの文献をいくつか見てみましたが、宮本勢助氏が『山袴誌』という本でモンペの語源について書かれていて、東京で「ももひき」と呼ばれていたものが山形を中心とする東北では「モッペ」や「モンペイ」、「モンペ」とも呼ばれていると述べられています。宮本勢助は「山袴」という言葉を使って「たっつけ」、「カルサン」、モンペについて書いていて、モンペは「雪袴」という分類をしています。彼は各地のモンペをたくさん集めていて、いつどこでどんな人が着用していたかも記

されていて、女性だけではなく男性が着用していた「たっつけ」やモンペも残っているということを知りました。

農村ではそもそも男女ともに着用していたモンペという作業着、もともと農村の作業着だったものが、戦中いかに女性化されたのかという点に私は関心を持っています。今日の森先生のお話をおうかがいして、近代化のなかで打ち捨てられていく農村的なものの、農村の美といったものが女性の衣服を通して正当化されていく流れなのかなと思いました。ひょっとしたら森先生のお考えと異なるかもしれませんが、単に女性化されたというだけではなく、農村ということに関して、先ほどまだまとまっていないというお話ではありましたが、とても興味深い視点でしたので、少しだけ加えてお話をおうかがいできればと思った次第です。

森 ありがとうございます。宮本勢助はどこかで読んで——平芳先生の論文で読んだのかなと……。

平芳 私はまだ引用したことはないと思います。民俗学的に価値のあるコレクションで、その様々な研究が服飾史と接続されればいいなと私は常々思っていて、モンペをいろいろ調べていました。

森 山袴の本はもちろん存じ上げております。女性の衣服を通して、農村の美意識が見直されたというご指摘ですか。

平芳 近代化のなかで、手作業や農村的なものはあまり価値がないものとして打ち捨てられていきますが、特に戦時中に、もともとは男女が着ていた服だったのに、男性は国民服を着て、それに対してモンペは女性のものとして習慣化されていく、構築されていく、そのプロセスが興味深いと思っています。

森 だいたい意見は一致しているように思いますが、私が言いたいのは、それが合っているかどうかというよりも、そういう言説が当時あって、それがモンペの魅力になったのだろうということなのです。繰り返し言いましたように、民芸運動や民俗学や生活文化運動のなかで、それこそファシズム期には「農村の美」ということがものすごく言われるわけです。そのなかでモンペのものになるようなものが見直されて、それで魅力として伝えられて波及したということが私の趣旨です。民俗学を含めた言説がモンペの普及のものになったということを私は言いたいと思っています。

平芳 ありがとうございます。文字で読めるのを楽

しみにしております。

帯谷 たいへん名残惜しいのですが、そろそろ時間がきてしまいました。今回は必ずしも意図したわけではなかったのですが、いずれのご報告も、何らかの形で日本に関わっているものが3本揃う形になりました。それと同時に、いずれも日本に閉じないお話だったことも共通点だったと思います。これを括ることは本当に難しいですが、「装いから見た世界の中国の日本」というようなサブタイトルが浮かび上がってきたように感じております。

私自身は中央アジアについて研究していますが、時代をさかのぼると、ソ連時代には社会主義を経験したところであり、さらにさかのほればロシア帝国の支配を経験していて、植民地主義や支配・被支配の関係が装いとどのように絡み合っていたかというような今日の議論から個人的にも多くのインプリケーションをいただいたと思います。支配する側とされる側の装いの複雑で興味深い相互関係については、杉浦さんのお話にも森さんのお話にも関わる場所でした。安城さんのお話からは、私は最近、過去に書かれた民族誌の中で中央アジアの装いがどう記述されていたかについて読んだりしているのですが、装いをめぐる記述や言説を私たちがどう捉えるべきなのかについて考えさせられました。また、杉本先生からご指摘があったように、伝統と近代を結ぶアイテムが何かあって、それが近代的かつ民族的な装いとして形作られていく、ブラッシュアップされていくときに意味付けが行われる、装いをめぐる記述や言説のなかでのそうした意味付けも興味深い問題だろうと思いました。

今日は本当に充実した濃密な時間をいただいたと思います。あらためまして報告者のみなさんとコメントーターのみなさんに感謝申し上げます。そして、今日は30名を超える方が常時お聞きくださっていたようですが、多数のご参加をいただきまして本当にありがとうございました。